

籠目土器と笊形土製品

鐘方 正樹

角南 聰一郎（奈良大学大学院）

I. はじめに

本稿は、弥生時代終末期～古墳時代後期にかけてみられる、器面に編物の圧痕を有する土器・土製品について、検討を試みるものである。また、ウワナベ古墳造り出し採集資料の紹介を合わせて行ない、その検討から派生する諸問題についても言及したい。

この種の遺物が初めて注目されたのは、昭和初期にまで遡る。1927年に杉山壽築男は、「河内国府及び常陸木原の2遺跡出土の「笊形の編物を型として、その内部に粘土を塗ってその儘焼いて作った」土器を紹介した（杉山 1927）。続いて高橋直一は伊勢国花岡出土の「笊形土器」を紹介し、土器づくりの一製作技法としてこの遺物をとらえた（高橋 1934）。

また、佐藤美津夫によってはじめて古墳出土の「笊形土器」が紹介された（佐藤 1937）。戦後になって岡山県の古墳発掘調査の際に、たて続けて古墳からこの種の遺物が出土した（木村・土井 1957、西谷・鎌木 1959、近藤編 1960）。金蔵山古墳の報告書中で、鎌木義昌は「籠目皿」の製作方法についてあれ「二枚の浅い笊の間に粘土をはさみ、両面からおしつけてつくったもの」とし、また口縁部形態について「削って整形したものと、ほとんど手を加えていないものとがある」としている。小林行雄は「籠型土器」について「土器を作ることの知られたのちに、一つの変った思いつきとして、試作されたとでもいうべきものが多い。したがって、籠を型とする土器の試作がおこなわれた時代も、縄文式時代にもあれば弥生式時代にもあり、また、古墳時代にもある」というように、一定していない」と評価した（小林 1964）。1975年には西日本の「籠形土器」が集成され（右島・河上 1975）、これを受けて植松なおみは、遺跡出土の籠類を検討する中で、全国的に「カゴ型土器」の遺物の集成を行なった（植松 1980）。この中でその性格について「土器面のカゴ目は単に土器成形法として付せられたものではなく、なんらかの意味をもって意識的にこの製法が選ばれており、カゴが当時の生活の中で、重要な存在であったことを知ることができる」とした。続いて平子弘は三重県天道遺跡出土「籠目土器」を考察する中で、植松の集成を更に増補しつつ、弥生時代末期～古墳時代中期に集中して出土し、古墳以外の遺跡から出土する例は古墳時代前期・古墳出土例は古墳時代中期に多いとした。その出土状況は古墳・竪穴住居跡・溝・祭祀的遺構であるとする。平子は初めてその形態と籠圧痕が外面のみに付着するか、内外面に付着するかで明確な分類を試みた（平子 1989）。これらのことから製作技法と関係するよりも「出土遺構や出土状況から、祭祀用の特別な土器である可能性が高い」とした。

ごく最近では東方仁史が、兵庫県行者塚古墳出土資料を中心として「笊形土器」を詳細に集成し、その分布が西は鳥取県北山古墳にまで拡大することを示した。また本稿でいう笊形土製品は、有機物である笊を恒久的な土製品に置き換え祭祀専用の特別な器として製作されたものと考えた。笊圧痕の意義に関しては「外面のみ圧痕が付されている土器は、古墳からの出土例がない。この土器に関しては型として笊を使用することとの関連が考えられる」とした（東方 1997a）。

以上の学史によれば、籠・笊を「型」として製作したと考えて名前を与えられた場合は、「籠型・笊型」と呼ばれ、籠・笊の「形」を真似たことを強調した場合は、「籠形・笊形」と呼ばれているらしい。

（角南）

II. 分類

今回集成した資料を通観すると、平子が分類したように土器の外面のみに編物の圧痕が認められる例と内外面の両面に編物の圧痕が認められる例の二つに大別できる。前者をA類、後者をB類と仮称して、以下にその違いを検討してみよう。

A類は粘土紐を籠の内側に積み上げて基本的に成形される。籠の口縁を大きく越えない高さで成形を終えて籠に類似する形態となる例（A 1類）とさらにその上に粘土紐を積み上げて壺・甕などの底部外面に籠の圧痕を残す例（A 2類）とがある。A 1類の口縁部は丁寧にヨコナデされる例が多い点で、B類とは異なる。

A類はその成形方法が土器と同じであり、外面の一部に籠の圧痕が残るために珍奇な遺物として注意されてきたにすぎない。A 1類の中には意図的に籠目を残して装飾性を高める例もあるが、A 2類の多くは底部の籠目がハケやナデによって部分的に消されており、必ずしも籠目に固執しているわけでもなさそうである。編物としての籠を型として利用したのは、木型や土型に比べてある程度の変形が可能であり、これが型はずしに際して有効に作用したためではないだろうか。土器の一部を型で成形するという点から考えて、これを籠形ないし笊形と呼ぶのは適当でない。「籠」を竹などで編んだ器物一般を指す語として使用し、その圧痕（籠目）¹⁾を有する特徴から籠目土器と呼称したい。

B類は、粘土を2枚の笊の間に挟み込み押圧して成形する。この際に笊の口縁からはみでた部分をヘラで削り取る例もあり、笊の高さを越えて口縁部がのびるものはない。このため、内外面の全面に笊の圧痕が明瞭に残ることになり、一見して笊を写し取ったようにみえる。そして、行者塚古墳の調査成果から想定されているように魚などの食物形土製品を中心に入れていたとすれば、籠よりも笊の方がイメージ的に合致するように思える。この点から、B類は笊を土で模造したものと考えるのが妥当であり、古墳において他の土製品と共に伴する場合が多いこととも関連しよう。そこで、B類を笊形土製品と呼称したい。

従来、籠目土器、籠形土器、籠型土器、笊形土器などと一括して呼ばれてきた編物の圧痕を

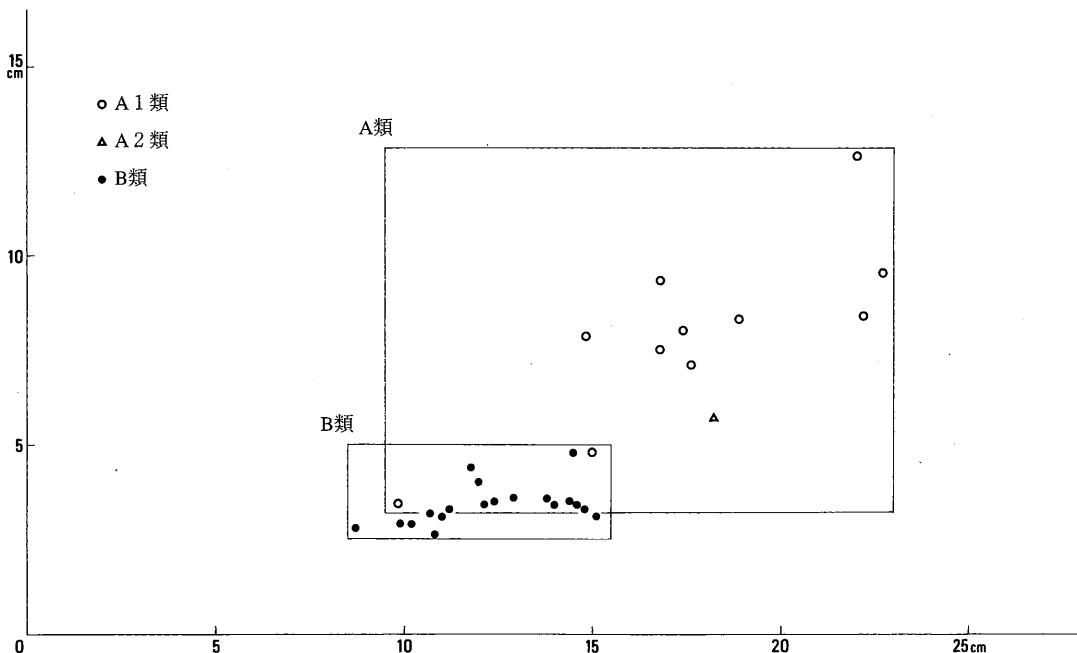


図1 篠目土器、笊形土器の法量分布

有する土器の中には、全く系統の異なる籠目土器（A類）と笊形土製品（B類）が包括されていることが以上のことから推定できる。そこで、それぞれの具体相について次に論述してみたい。

（鐘方・角南）

III. 篠目土器

A. 製作技法と法量

籠目土器の多くには粘土紐接合痕が認められ、これらは明らかに粘土紐成形である。器種には壺・甕・鉢・杯・甌があり、それにその製作技法を考えてみよう。鉢については、籠内面を型として粘土紐を積み上げた工程で、内面をナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリなどによって調整し、外面には籠目が押圧された状態のままで成形段階を終了する。壺・甕・甌についても、その底部成形は鉢と同様であり、纏向遺跡東田地区北溝下層出土の壺下半部外面には明瞭に粘土紐の積み上げ単位が見られる。そして乾燥工程を経た後に上へさらに粘土紐を積み上げていくと考えられる。このため、籠目は底部のみにしか押圧されていない。鉢との大きな違いは、ほとんどの資料で外面のこの籠目压痕が、ハケ・ナデなどによって部分的に消されている点である。これらのことから、籠目土器は底部分割成形技法（都出 1974）²⁾を行なう際に型として籠を使用した土器である可能性が高いと考えられる。籠目土器は3世紀後半から6世紀中頃まで若干の断絶はあるものの、連綿と認められる。つまり籠目土器のほとんどは小林行雄の言うような单なる試作品ではない。ただし、前述の纏向遺跡東田地区北溝下層出土の壺については、籠目压痕があたかもさきほどまで籠がそこにあったかのごとく鮮明に残存しており、籠から取り外した後のハケ・ナデなどの調整は全く認められない。装飾的な意図で籠目をそのまま残す場合もあったことがわかる。

籠目土器は、底部の形態に特徴がある。3・4世紀には籠の形態を維持してそれが方形を呈するものがほとんどであるのに対して、5・6世紀になると丸底となるものが主流である。成形第一段階に四角い底部を有する籠を型として底部の成形をしたままであれば、底部平面形態は方形となる。生地を籠から一旦取り外した後、再び籠を台として利用し中で回転させてから取り外せば、底部平面形態は多角形を呈する。そして底部多角形を呈するものを更に調整して角を取り去れば丸底状となる。また三河・遠江地方では、5・6世紀の甕・甌などの底部に見られる籠目がこの時期の特徴的な成形技法を示すとされ（吉岡 1996）、籠目をハケ・ケズリなどで消していると考えられるものも含めれば、ごく普遍的に見られる。

このように見てみると籠を型として用いた成形技法は、分割成形技法が盛んに用いられるようになる弥生時代後期に出現する。関西では弥生時代後期～古墳時代初頭の分割成形技法はタタキ技法によって底部を成形するのが、一般的である。弥生時代後期以降、関東でも分割成形による土器製作が盛んに行われたことが想定されている（井上 1991）が、東日本では基本的に一部の外来系土器を除いて、タタキ技法による分割成形が行なわれたとは考え難い。にも関わらず、壺・甕などの大型器種には明確な接合痕が認められ、分割成形以外の製作工程を想定することは困難を極める。関東の研究状況を考慮するならば、西川修一が指摘するような「甕のような高杯」（西川 1992）が、有力な根拠となる。西川は從来高杯が存在しなかった南関東に弥生時代中期終末に西日本から高杯が波及した際と前後して、台付甕の底部と形態の類似する高杯が存在することを指摘し、分割成形技法はこの時期以降に東日本へと波及したとする。つまり東日本ではタタキ技法を用いなくても分割成形が行われていたことが想定できる。そこで次の様に考えてみることも可能である。関西ではタタキ技法、関東では手捏ね技法によってそれぞれ主体的に分割成形

を行なう技術系統が存在し、その中間地域（伊勢・三河・遠江）には、これらと別系統の籠型による分割成形を行なう技法が存在していたのではないか。また型による分割成形は、器面に痕跡が遺存していないため確証に欠けるが、木器や土器の底部によっても可能であろう。

法量に関しては、A 1 類が全体で口径9.8~22.7cm、器高3.4~12.6cmの範囲内に収まる。笊形土製品と比して規格性に乏しいが、大局的にみて大・小に峻別可能である。このうち小型のものは布留遺跡例（口径9.8cm、器高3.4cm）と馬渡遺跡例（口径15.0cm、器高4.8cm）の2例のみである。またA 2 類のうち底部の籠目が明確な纏向遺跡出土壺下半部（図1の△）の法量をみてみると、大型のグループに近い値を示している。3・4世紀のA 1 類の器高は7.1~9.3cmの間でまとまりを示していることも付言しておきたい。

B. 消長と展開

籠目土器は、管見によれば東は茨城県から西は福岡県にまで分布している（表1）。時期別にみると、3世紀後半～4世紀初頭段階の分布は主として西日本にあり、5世紀後半～6世紀中頃段階では逆に、太平洋沿岸の東日本一帯へと変化していく。このうち最も出土数が多いものは鉢で、次いで甕の点数が多い。

次にその消長を概観すると、籠目土器には二つのピークが存在することがわかる。第1のピークは、3世紀後半～4世紀初頭、土器型式でいうならば庄内I式～布留I式の段階である。第2のピークは、5世紀後半～6世紀中頃の段階である。第1のピークでは鉢などのA 1 類が圧倒的に多く、第2のピークでは壺や甕などのA 2 類の数が多い。

さて、3世紀段階では畿内にのみ籠目土器が出土することから、土器製作技法としての籠目土器の出発地点は畿内周辺であると考えられ、分割成形技法のための一技法としてタタキ技法とは別に引き継がれていたと考えられる。4世紀初頭段階に入ってからは、散発的に北部九州や関東で籠目土器が出土しているが、これを籠を型とした分割成形技法の波及ととらえるには、現段階では資料数が限定され明言できない。4世紀後半～5世紀前半の期間は、現在の所資料が無く不明である。5世紀中頃には、浜松市でTK208型式の須恵器に伴う資料の甕・甌³⁾が出土していることから、確実に型作り・分割成形としての籠目土器が存在しているといえそうである。この後、TK47～MT15型式併行段階にかけて三河・遠江地方を中心として出土点数は増加し、器種もバラエティーに富むようになる。また、管見によるとこの時期伊勢にはA 2 類の甕が数例見られるが、伊勢湾を挟んだ尾張では出土例を知らない。伊勢から尾張を通り越して三河にこうした技法が見られるのは、近代化以前の「海の道」の辿ったルートと符合する。このような「海の道」の在り方と、土器製作技法とがあながち関係しているのではなかろうか。なお、タタキ技法との関連で、興味深い事例がある。愛知県山崎遺跡では平成3年度の調査で計3点の籠目土器の甕底部が出土しているが、これと同一の土器群からはこの地方に存在していないタタキ技法による甕底部1点も紹介されている（小野田・森田編 1993）。

C. 機能

出土状況については、3世紀後半～4世紀初頭段階は井戸、祭祀遺構といった特殊な出土例が見られる。しかし、5世紀後半～6世紀中頃段階では住居跡からの出土が目立つ。籠目土器を祭祀遺物とする説について若干検討してみると、和歌山県井辺遺跡での井戸からの出土例については、器面に赤色塗布されていた可能性を報告者は指摘している（菅谷・久野ほか 1965）。三重県阿形遺跡の場合、平子弘が指摘したように籠目土器の甕底部は手捏ね土器・高杯・結晶片岩製の有孔円盤とともに出土している。しかしこれらの遺物は試掘調査によるもので、層位的に供伴関係にあるかどうか

うか疑問である。また埼玉県塩西遺跡の場合は、手捏ね土器などの土器群に伴って籠目土器鉢が出土している。周辺から同時期の方形周溝墓⁴⁾が3基検出されており、祭祀遺構の可能性も十分に考えられるものの、逆に祭祀遺構であることを立証する決め手も欠いている。

以上のことから勘案して、その機能を仮定してみると、籠目のほとんどは土器製作に伴うものであり、完成品としての土器は、一般的な土器と同様に使用されたと考えられる。ただし、前述の諸例や、纏向遺跡東田地区北溝下層出土の壺のごとく、籠目を見せるなどを意識したと考えられる例、伊場遺跡住居跡 K D-11出土の甌が貯蔵穴状の小穴中に、本物の籠の上に置かれた形で出土した例などは、この種の土器で特別な使用がなされた可能性も提示している。(角南)

IV. 箕形土製品

A. ウワナベ古墳西側造り出し採集資料の検討

今回図化したウワナベ古墳西側造り出し採集資料には、箕形土製品、杓子形土製品、ミニチュア土器、土師器壺・高杯、須恵器壺・高杯がある。以下にそれについて観察結果を記す。

1～5は箕形土製品である。それぞれ同一個体と考えられる破片が、2～6片あるが接合しない。このため各個体について、図上復元を行なったことを予め明示しておく。

法量は、1と2が残存高2.2cm、3が復元口径12.5cm、器高3.4cm、4が復元口径10.8cm、器高2.9cm、5は復元口径11cm、残存高2.8cmである。口縁部形態は、2のみ丸く、それ以外はヘラで面取りされて方形を呈する。いずれの個体にも内外面ともに箕の圧痕がみられる。2を除く個体には赤色顔料の塗布が認められる。焼成は1・4・5がやや軟、2が軟、3が堅緻である。色調は1・5は灰白色、2は浅黄色、3・4はにぶい黄色を呈する。胎土は1・2・5がやや粗、3・4が粗である。

ところで成形方法は、接合痕がまったく認められないことから、すべての個体が粘土板によるものと考えられ、粘土紐によるものではないことが看取される。

6は杓子形土製品である。ほぼ完形で、長さ2.6cm、高さ1.3cm、柄部幅0.7cm、杓部幅1.4cm、孔径0.7cmである。全体にナデ調整を行なう。焼成は堅緻で、色調は淡黄色を呈し、胎土は密で

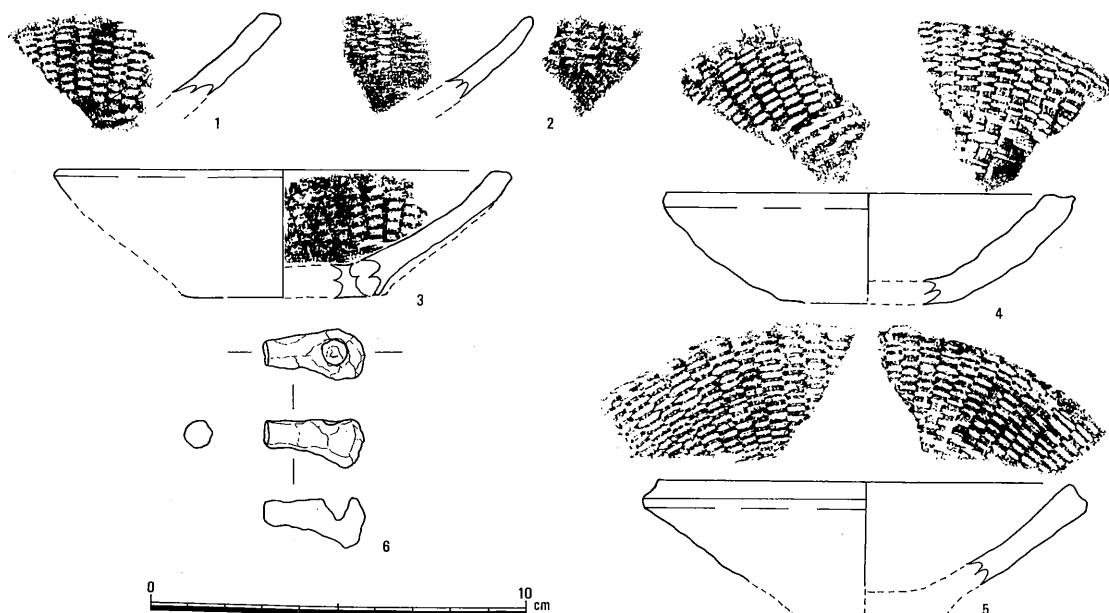


図2 ウワナベ古墳採集の土製品 (1/2)

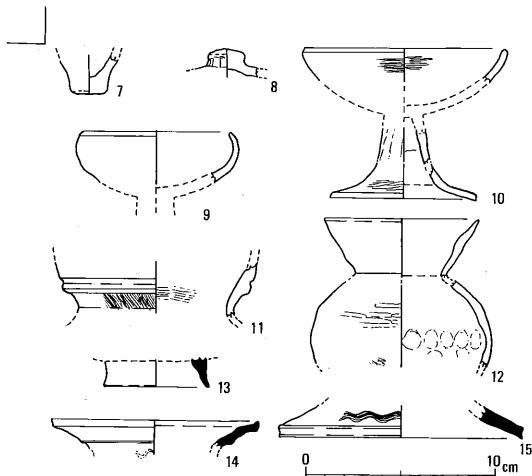


図3 ウワナベ古墳採集の土器 (1/4)

は杯部のみ残存する。杯部は椀形を呈し、口縁部内面はナデ調整である。復元口径7.8cm、残存高2.8cmで、色調はにぶい橙色を呈する。10は同一個体と考えられる杯部片と脚部から、図上復元した。復元口径10.5cm、復元底径7.7cmで、色調は橙色を呈する。杯部内外面及び脚部外面に横方向のミガキを行ない、脚部内面はヘラケズリする。11は口縁部から頸部のみの破片資料で、残存高は2.9cmである。口縁外面に段状の稜を有す。外面はヨコナデ調整されるが、頸部にはナデ以前のタテハケが残る。内面は外面同様にヨコナデされるが、頸部にはヨコハケの痕跡が見られる。色調はにぶい赤褐色を呈する。12は復元口径8.2cm、残存高7.8cmで、口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ後縦方向のミガキを行なう。胴部内面の下半部に、比較的明瞭な指頭圧痕を残す。色調は橙色を呈する。

13～15は須恵器である。13は器種不明の高台部、14は壺口縁部、15は高杯脚部である。この他に、図化できなかったが、内外面に赤色塗布をする須恵器片が数点ある。胎土はすべて密で、焼成は13が堅緻で14・15が軟質である。13は復元底径5.7cmで、色調はにぶい黄橙色を呈する。14は復元口径11cmで、色調は浅黄橙色を呈する。内外面ともにヨコナデ調整をし、口縁部に波状文の一部が残存する。15は復元底径12.9cmで、色調は橙色を呈する。

過去に報告されたウワナベ古墳採集資料としては、土師器、須恵器、土師質土製品がある。土製品は、魚形土製品2点と棒状土製品1点が報告されている。土師器については、小型高杯脚部、蓋のつまみ部、底部の突出する鉢があるとされる。須恵器には、蓋杯・高杯・蓋・壺・器台・甌がある（町田 1974）。ウワナベ古墳採集須恵器の特徴は、植野浩三によれば以下になる。総体的に厚めに作り、端部・稜などは太めに丸めに、鈍く仕上げ、小型品はケズリなどが顕著ではなく調整が雑になっているが、壺・器台などの波状文は丁寧に施す。焼成は軟質のものもあるが、ほとんどは硬質である。ほとんどの色調は、赤褐色系で青灰色系のものは微量である。大半のものの内外面に、焼成前に塗布された赤色顔料が認められる。また形態的にTK216型式の範疇でとらえられる（植野 1993）。

以上のことを見てみると、特に注目されるのは土師器の小型高杯と土製品である。土師器小型高杯は金蔵山古墳・行者塚古墳・百舌鳥大塚山古墳・梶塚古墳・乙女山古墳・ナガレ山古墳・昼飯大塚古墳で筒形土製品とともに見られる。堀大輔によれば、筒形土製品は、土師器高杯・壺・他の土製品とともに、供獻祭祀のセットを構成するとされ、土製品は何らかの食物を模したものが中心である（堀 1997a、1997b）。堀の指摘するように、過去に紹介された土製品には、魚形土製品や食物を模した土製品があり筒形土製品が伴っていると言えた。し

ある。杓子形土製品は、近畿地方では縄文時代晚期より集落を中心として希に出土するが、本資料はそれらと比較して、非常に小型であることが特徴的である（角南 1993）。

7～12は土師器である。7は壺形ミニチュア土器、8は有蓋高杯の蓋、9・10は高杯、11は二重口縁壺、12は直口壺である。胎土はそれぞれ密で、焼成は9がやや軟質である以外は堅緻である。7は底部のみ残存し、内面ナデ調整をする。底径は2cm、残存高2.1cmで、色調はにぶい黄橙色を呈する。8はつまみ部のみ残存し、残存高1.5cmで、色調はにぶい橙色を呈する。9

は杯部のみ残存する。杯部は椀形を呈し、口縁部内面はナデ調整である。復元口径7.8cm、残存高2.8cmで、色調はにぶい橙色を呈する。10は同一個体と考えられる杯部片と脚部から、図上復元した。復元口径10.5cm、復元底径7.7cmで、色調は橙色を呈する。杯部内外面及び脚部外面に横方向のミガキを行ない、脚部内面はヘラケズリする。11は口縁部から頸部のみの破片資料で、残存高は2.9cmである。口縁外面に段状の稜を有す。外面はヨコナデ調整されるが、頸部にはナデ以前のタテハケが残る。内面は外面同様にヨコナデされるが、頸部にはヨコハケの痕跡が見られる。色調はにぶい赤褐色を呈する。12は復元口径8.2cm、残存高7.8cmで、口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ後縦方向のミガキを行なう。胴部内面の下半部に、比較的明瞭な指頭圧痕を残す。色調は橙色を呈する。

13～15は須恵器である。13は器種不明の高台部、14は壺口縁部、15は高杯脚部である。この他に、図化できなかったが、内外面に赤色塗布をする須恵器片が数点ある。胎土はすべて密で、焼成は13が堅緻で14・15が軟質である。13は復元底径5.7cmで、色調はにぶい黄橙色を呈する。14は復元口径11cmで、色調は浅黄橙色を呈する。内外面ともにヨコナデ調整をし、口縁部に波状文の一部が残存する。15は復元底径12.9cmで、色調は橙色を呈する。

過去に報告されたウワナベ古墳採集資料としては、土師器、須恵器、土師質土製品がある。土

製品は、魚形土製品2点と棒状土製品1点が報告されている。土師器については、小型高杯脚部、

蓋のつまみ部、底部の突出する鉢があるとされる。須恵器には、蓋杯・高杯・蓋・壺・器台・甌

がある（町田 1974）。ウワナベ古墳採集須恵器の特徴は、植野浩三によれば以下になる。

総体的に厚めに作り、端部・稜などは太めに丸めに、鈍く仕上げ、小型品はケズリなどが顕著で

なく調整が雑になっているが、壺・器台などの波状文は丁寧に施す。焼成は軟質のものもある

が、ほとんどは硬質である。ほとんどの色調は、赤褐色系で青灰色系のものは微量である。大半

のものの内外面に、焼成前に塗布された赤色顔料が認められる。また形態的にTK216型式の範

疇でとらえられる（植野 1993）。

以上のことを見てみると、特に注目されるのは土師器の小型高杯と土

製品である。土師器小型高杯は金蔵山古墳・行者塚古墳・百舌鳥大塚山古墳・梶塚古墳・乙女山

古墳・ナガレ山古墳・昼飯大塚古墳で筒形土製品とともに見られる。堀大輔によれば、筒形土製品

は、土師器高杯・壺・他の土製品とともに、供獻祭祀のセットを構成するとされ、土製品は何

らかの食物を模したものが中心である（堀 1997a、1997b）。堀の指摘するように、過去に紹介さ

れた土製品には、魚形土製品や食物を模した土製品があり筒形土製品が伴っていると言えた。し

かし、今回紹介した資料中には、ミニチュア土器と杓子形土製品があり、杓子形の土製品が伴うのは初見となる。このうち杓子形土製品は、液体を掬い取るための木製杓子を模したものと考えられる。これ自体が食物を模しているわけではないが、土製品に置き換え難い液体の食物・飲料を象徴する品目であると解釈できる。このことから、これらの土製品は供獻儀礼に伴う飲食物とその食器のセットを模したものであるといえよう。

(角南)

B. 製作技法と法量

笊形土製品は、粘土を2枚の笊の間に挟み込み押圧して成形する。この際、外型となる笊の内面にまず粘土を押しつけていくが、笊底部の四隅の足目まで明瞭に写し取るための指オサエの跡が残る例（誉田白鳥遺跡出土例）もみられる。その後、内型となるもう1枚の笊を内側から押し当てるが、押圧が不十分な場合は底部内面に笊目がつかないことがある。口縁部の形態には2種があり、笊で挟み込んで仕上げる例と笊からはみでた部分をヘラで切り揃える例がある。

他の出土例をも合わせて笊形土製品の法量を調べてみると、概ね口径8.5～15.5cm、器高2.5～5.0cmの範囲にまとまることがわかる。この法量は、型として使用した笊の大きさをほぼ反映しているとみられ、籠目土器の製作に利用された編物よりも相対的に小型の籠が用いられる傾向を看取できる。なお、馬渡遺跡から出土している籠目土器杯の法量は笊形土製品のそれに近いが、口縁部を直立させ底部外面をヘラケズリで丸く仕上げて模倣杯の形態を維持する点で須恵器杯との関連を考慮させる資料である。

C. 出現と終焉

笊形土製品の出現時期を考える資料としては、巣山古墳、ナガレ山古墳、古市方形墳、金蔵山古墳、昼飯大塚古墳がある。いずれもⅡ群の円筒埴輪を主体とするが、ナガレ山古墳ではⅢ群の円筒埴輪も共伴するよう、円筒埴輪のⅡ群の新相から一部にⅢ群が共伴してくる頃に出現していくとみられる。この時期は、古墳時代前期から中期への移行期に相当しよう。定形化された形象埴輪や滑石製模造品が出現していく頃でもあり、古墳での祭祀儀礼が定式化する中で様々な品目と共に笊形土製品は創出されたものと理解することができる。供獻飲食物やその食器は土で、農工具や玉などは滑石で模造され、墳丘上での祭祀儀礼に使用されたらしい。

笊形土製品を伴う祭祀儀礼は中期中頃まで継続するが、須恵器の導入によりやがて終焉を迎える。その終焉を考える上で、ウワナベ古墳採集資料は重要となろう。遺物の配列などは不明であるが、土師器、土製品と須恵器が分けて配置されていた可能性はそれ以前に祭祀儀礼が定式化している点からも十分に想定できる。そして、中期後葉には墳丘上に須恵器のみを配置する場合が多くみられるようになることから、土師器、土製品は須恵器にとって代わられていくと考えたい。笊形土製品の消失を考える上で特に注意したいのが、須恵器杯の出現である。須恵器杯という器種は從来の土師器になかった形態であり、その法量は笊形土製品ともよく似ている。ウワナベ古墳西側造り出し採集の須恵器の中に杯身がほとんどみられない点は、それと関連して興味深い。須恵器杯がその後の祭祀儀礼において主要な器種となることから、笊形土製品は機能的に須恵器杯に駆逐されていったと考えられなくもない。笊形土製品の消失は、それと共に製作されていた飲食物など他の土製品の消失も連動させたに違いない。

D. 出土位置と機能

笊形土製品の出土位置を通観すると、古墳の墳頂部あるいは造り出しからの出土例がほとんどである。誉田白鳥遺跡例のみ溝内からの出土であるが、当該遺跡は古市古墳群の範囲内にあり、削平された古墳も周辺で確認されている。あるいはこれも、当初は古墳に伴っていたものかもし

れない。

さて、その出土位置について少しここで検討してみたい。前方後円墳の造り出しから出土した例には、ウワナベ古墳、巣山古墳、百舌鳥大塚山古墳、行者塚古墳、乙女山古墳がある。このうち、乙女山古墳、百舌鳥大塚山古墳を除く3古墳には複数の造り出しがあり、すべて西側の造り出しから出土している。乙女山古墳の造り出しは後円部に一つ取りつくが、これも西側にある。一方、百舌鳥大塚山古墳の造り出しは北側にあるが、これは古墳の主軸が東西方向であることに起因している。ただし、後円部を上にしてみると、古墳のくびれ部の右側に造り出しが取りつくこととなる。

円墳や方墳からも笊形土製品は出土している。円墳の造り出しから出土した例としては月の輪古墳、クワンス塚古墳がある。造り出しは前者が北側、後者が北西側に取りついている。方墳では梶塚古墳での出土状況が注意される。1975年に発掘された墳丘西辺中央部分の調査区内の下段テラスから土師器高杯11点、土製円盤1点などと共に12点以上がまとまって出土している。墳丘西辺の南北での調査成果からその下段テラスの幅は約3mと推定されているが、中央部分での下段テラスの幅は3mを上回るようであり、ここに造り出しが取りつく可能性を十分に想定できるのではなかろうか。

墳頂部での出土状態から原位置が判明した例としては金蔵山古墳を挙げられる。後円部にある東西主軸の中央石室を挟んで西側から笊形土製品3点、土師器高杯35点以上、鏡1点が、東側から滑石製模造品（刀子形約81点、鎌形1点、剣形1点）が出土しており、品目によって明確に分置されていた。頭位は東と推定できるから、笊形土製品や高杯は足元の方向に置かれていたことになる。また、原位置は明確でないが、昼飯大塚古墳の後円部墳頂からも最近確認されている。古墳の主軸は東西方向で、後円部を上にしてみると出土位置は墳頂の右側（北側）となる。

さらに前方部埋葬施設の墓坑埋土から出土したナガレ山古墳の調査例について注目してみたい。前方部埋葬施設は墳丘主軸より東側に片寄って位置する。すなわち、意図的に西側に一定の空間を設けていると考えられる。粘土櫛上面レベルで祭祀面を造成し、刀形、鋤先形鉄製品を埋置する行為が墓坑内で確認されており、これと同時に西側の空間で土師器、土製品を使用した祭祀儀礼が行なわれた可能性は想定できないだろうか。この後にこれらを片付けて墓坑へ土と一緒に放り込んだものと考えたい。本例のように前方部埋葬施設が墳丘主軸と平行しながらそれより片寄って位置する例としては、玉手山1号墳、駒ヶ谷宮山古墳、百舌鳥大塚山古墳がある。後円部を上にしてみた場合、いずれも左側に片寄っており、右側半分はあたかも通路上に空いている。やはり左重視の配置と右側の空間設定に共通の意図を想起させる。

他に埴輪棺の透孔を塞ぐ例（陣場山古墳）があるが、再利用されたもので本来の機能を示すとは考え難い。

数少ない事例ではあるが、これらから判断する限り笊形土製品は古墳の西側あるいは右側へ意識的に配置されていた可能性が十分に考えられるのではないだろうか。後円部を北に向けるウワナベ古墳、行者塚古墳では西側が右となる。そして、指摘されているように高杯や壺などの土師器や土製品と共に伴する例がほとんどである。行者塚古墳には四つの造り出しがあり、調査成果から複数の異なった機能を有していたのではないかと推定されている。特にくびれ部の東西に位置する造り出しの調査内容は興味深い。西側造り出しには笊形及び食物形の土製品が土師器高杯と共に置かれており、食物を笊や高杯にのせて供献した様子を表現していたらしい。そして、これらの供献品は造り出し中央東寄りに配置された家形埴輪群の西側に位置していた。北西側造り出

しからも土師器壺、高杯などが多く出土しており、笊形土製品は出土しないものの西側造り出しと同様の祭祀が行なわれていたのではないかと推定されている。逆に、東側造り出しはほとんど未調査のためにその詳細は不明であるが、槽形⁶⁾と考えられる埴輪（船形土製品と報告されているもの）が出土していて、水を使用した祭祀場などが再現されていた可能性がある。この時期には東方重視の思想が日本にもあり、東側に首長墓を望みながら御靈の宿る家形埴輪群の西側で食物などの供献行為が行われたとすれば思想的にもこの方向性は合致してくるように思える。墳頂部においても同様で、金蔵山古墳のように東頭位の場合は、被葬者を東に見ながら足元方向の西側で供献行為が行なわれている。

ところで、中国古典の『儀礼』には、死者の埋葬後に殯宮で行なう祖神への饌供獻儀礼（土虞礼）についての記述がある。これによれば、土虞礼は殯宮の西側で主に行なわることになっている。吉方の東に対して西は凶喪と対応し、喪祭には西方が重視された。また、饌を設けるにあたって陰厭と陽厭があり、後から行なわれる陽厭では饌を室の西南隅から西北隅へ改めることができると記されている。東方重視を思想的背景とする点では古墳の祭祀儀礼と一致し、陰厭、陽厭が西南、西北と関連する点は行者塚古墳の調査成果を検討する上で興味深い。祭祀儀礼の定式化にあたっては、中国での儀礼方式の影響を受けている可能性も十分に考慮しておく必要があろう。（鐘方）

V. まとめと展望

従来、笊形土器あるいは籠型土器などと呼ばれ一括して扱われてきた遺物を、籠目土器と笊形土製品の二つに大別してその系譜や機能の違いなどを論じることにより、これらの存在意義がより一層明確化したのではないかと考えている。籠目土器は3世紀後半～4世紀前半に近畿地方を中心として分布する。その後、5世紀後半～6世紀中頃にかけて東海地方の特に三河・遠江地方を中心としてごく一般的に見られるようになる。籠目土器の製作技法については、時間軸上でのその系譜関係を整理していくことにより、これが単なる試作品でないことを明らかにできるであろう。おそらく弥生時代後期にあらわれてくる分割成形技法の技術史的系譜を引いて出現した一手法と推定され、底部を独立的に製作して多様な器種に対応させるような設計思想を反映していると思われる。これらにはタタキ成形が認められず、器壁が厚ぼったくなるものが多い。底部の製作にあたって籠のような型を使用するか否かの相違は、本質的にはそれほど差がないように思われる。むしろその背景にある土器製作の技術体系の中でとらえていく必要があろう。この様に考えれば、タタキ技法が存在しない東日本においても弥生時代終末以降に分割成形技法による底部成形が盛んに行われたことも納得できよう。

笊形土製品についても、古墳上で行われた祭祀儀礼の具体相と変遷を追求する上で重要な資料であることを再確認した。特に行者塚古墳の調査成果からそれが他の土製品とともに飲食物供獻儀礼に関連する遺物であることが判明し、その出土位置の検討から古墳の西側（右側）に配置される傾向が強いことを明らかにした。共通した儀礼行為が古墳時代中期に広く行なわれている事実は、定式化した儀礼体系の存在を想定させずにはおかないと。（鐘方・角南）

本稿作成に際して、以下の諸先生・諸氏に御教示・御協力を賜った。記して感謝致します。
赤熊浩一、上田 瞳、植野浩三、小木谷晃与、鴨志田篤二、川崎志乃、川江秀孝、木下 亘、後藤理加、坂口 一、白石真理、鈴木敏則、関口 修、立花 聰、豊岡卓之、中井正幸、中島和彦、西田泰民、半澤幹雄、菱田哲郎、福田 聖、堀 大輔、右島和夫、三好孝一、三好美穂、村井田雅明、村瀬 健、森田安彦、矢口裕之、安井宣也、山形美智子、吉田正人、吉村公男（敬称略）

註

- 1) 籠と笊という語の区別に関して、小泉和子は家具史研究の立場から、籠は「もの入れ」であり、笊は「水切りの道具」であると定義している（小泉 1994）。また小泉によれば笊という語は、江戸時代になって江戸を中心に用いられるようになったという。
- 2) 島田貞彦は原始・古代土器製作での轆轤の意義を考察する中で、アメリカのプロインディアンが土器製作の際にPukisという「皿型盤」に粘土を押し固め底を模す例やフィリピンで竹製の大形箕が轆轤的回転の用途に使用される例を挙げている（島田 1931）。籠にもこうした機能を有した可能性は十分に考えられる。
- 3) 鈴木敏則氏の御教示による。
- 4) 本稿では報告の通りに「方形周溝墓」の語を用いたが、この方形周溝墓は五領式期、つまり古墳時代前期の遺構と報告されている。西日本では弥生時代の四方に周溝を巡らせる墓は方形周溝墓、古墳時代になると方墳と呼称するのが通例となっている。山岸良二が指摘したように（山岸 1991）、方形周溝墓の実体自体に対する、西日本と東日本の研究者間での認識のズレが生じていることによるものである。
- 5) 堀は百舌大塚山古墳の造り出しからベッド状、案、椅子などの器物形土製品が出土していると述べている（堀 1997a）が、これらの土製品の出土地点は前方部墳頂に置かれた家形埴輪の隣接地であり（森 1978）、誤りと思われる。
- 6) 最近調査された藤井寺市狼塚古墳から、類似した埴輪が圓形埴輪の中央に置かれた状態で出土している。藤井寺市教育委員会の上田睦氏の御教示によれば、これが水に関わる祭祀場の導水施設の一部に認められる木製槽に形態的特徴がよく似ているという。

【引用・参考文献】

- 赤塚次郎 1979 「『古市方形墳』整理ノートより」『古代学研究』89 古代學研究會
新井 端 1984 『江南村内遺跡群1』 江南村教育委員会
飯塚恵子・田口一郎編 1981 『元島名將軍塚古墳』 高崎市教育委員会
池田末則訳註 1976 『儀禮』 IV 東海大学出版
石野博信・関川尚功 1976 『纏向』 桜井市教育委員会
井上晃夫 1991 「土器製作工程に関する諸問題」『神谷原』 I 八王子市飼田遺跡調査会
植野浩三 1993 「埴輪生産と須恵器工人」『文化財学報』11 奈良大学文学部文化財学科
植松なおみ 1980 「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』35 物質文化研究会
漆畑 敏 1987 『伊場遺跡遺物編4』 浜松市教育委員会
漆畑 敏 1990 『伊場遺跡遺物編5』 浜松市教育委員会
大塚初重・小林三郎 1976 『茨城県馬渡における埴輪製作址』 明治大学文学部考古学研究室
岡本聰 1993 『寺川遺跡・天白遺跡・西脇遺跡』 新居町郷北土地区画整理組合・新居町教育委員会
奥村清一郎・植田千佳穂 1975 「梶塚古墳発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 3 城陽市教育委員会
小野田勝一編 1991 『山崎遺跡』 田原町教育委員会
小野田勝一・森田勝三編 1993 『山崎遺跡』 田原町教育委員会
門田了三 1985 『城屋敷遺跡』 名張市教育委員会
川崎みどり 1989 「神明遺跡」『岡崎市史 史料考古 下 16』 岡崎市
木下亘ほか 1988 『乙女山古墳』 河合町教育委員会
(財) 京都市埋蔵文化財研究所編 1986 『平安京発掘資料選』(二) (財) 京都市埋蔵文化財研究所
木村幹夫・土井秋夫 1957 「円筒棺を出した備前赤磐郡江尻陣馬山前方後円墳について」『瀬戸内考古学』1 瀬戸内考古学会
小池史哲 1995 『上唐原遺跡I』 福岡県教育委員会
小泉和子 1994 『台所道具いまむかし』 平凡社
小柴秀樹編 1992 『坂戸遺跡』 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所

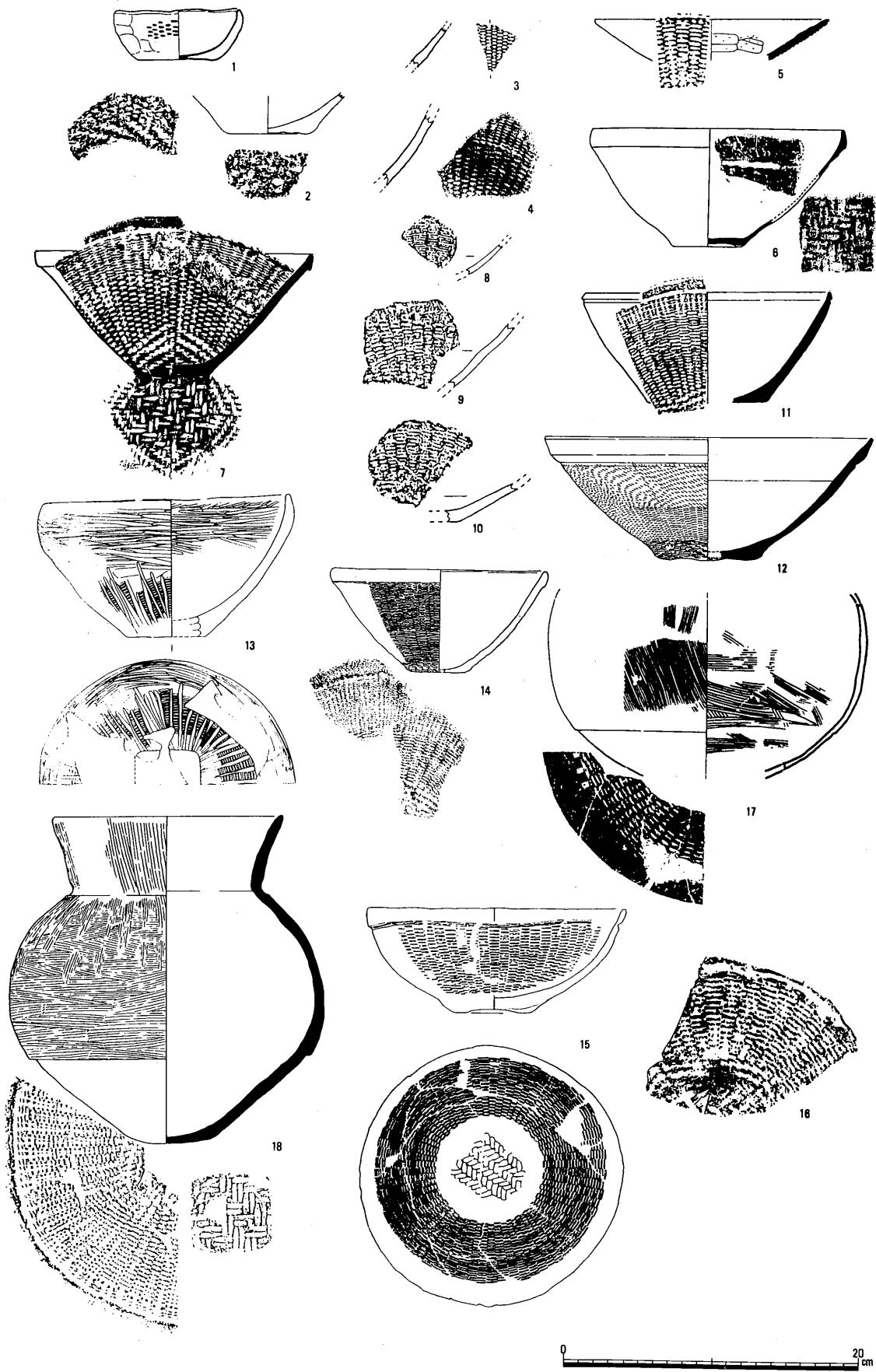
- 小林行雄 1964『統古代の技術』 塙書房
- 近藤義郎編 1960『月の輪古墳』 月の輪刊行会
- 近藤義郎・中田啓司 1987「三笠山古墳」「総社市史 考古資料編」 総社市
- 佐藤美津夫 1937「備前金蔵山古墳出土の笊形土器」『考古學』8-1 東京考古学会
- 佐野一夫ほか 1997『九反田遺跡』(財)浜松市文化協会
- 山陰考古学研究所 1978『山陰の前期古墳文化の研究』 山陰考古学研究所
- 島田貞彦 1931「土器成形上に於ける輿轄の意義」『考古学雑誌』21-6 日本考古学会
- 末永雅雄編 1935『本山考古室要録』 岡書院
- 菅谷文則・久野邦雄ほか 1965「井辺弥生式遺跡発掘調査報告」「社会教育資料」24 和歌山市教育委員会
- 鈴木基之 1989『原川遺跡Ⅱ』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木敏則 1994『梶子遺跡IX』(財)浜松市文化財協会
- 鈴木久男・吉崎伸 1987「鳥羽離宮跡102次調査」「昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要」IV (財)京都市埋蔵文化財研究所
- 杉山壽榮男 1927「石器時代の木製品と編物」『人類學雜誌』42-8 東京人類學會
- 角南聰一郎 1993「近畿地方出土の匙・杓子」「河内平野遺跡群の動態」VI (財)大阪文化財センター
- 高橋直一 1934「笊形土器考」「ドルメン」3-10 岡書院
- 高橋美久二ほか 1979「長岡京跡昭和53年度発掘調査概報」「埋蔵文化財発掘調査概報(1979)」京都府教育委員会
- 瀧瀬芳之・劍持和夫・新井端 1995「古墳時代の遺跡」「江南町史 資料編1 考古」江南町
- 立花聰 1997「クワンス塚古墳」「祭祀考古学会兵庫大会資料」祭祀考古学会兵庫県実行委員会
- 辻林浩編 1991「笠嶋遺跡」(財)和歌山文化財センター
- 都出比呂志 1974「古墳出現前夜の集団関係」「考古学研究」20-4 考古学研究会
- 富田和夫・赤熊浩一 1985「梅沢」「立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢」「埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 豊岡卓之 1991「大和考古資料目録18 繼向遺跡資料(1)」「奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 中井一夫編 1983「和爾・森本遺跡」「奈良県立橿原考古学研究所
- 西川修一 1992「甕のような高坏」「考古論叢 神奈河」I 神奈川県考古学会
- 西谷眞治・鎌木義昌 1959『金蔵山古墳』 倉敷考古館
- 野上丈助 1972「誉田白鳥遺跡発掘調査概報」「大阪府教育委員会
- 東方仁史 1997a「笊形土器」「行者塚古墳発掘調査概報」「加古川市教育委員会
- 東方仁史 1997b「笊(ざる)形土器・土製品」「昼飯大塚古墳第5次発掘調査現地説明会資料」「大垣市教育委員会
- 平子弘 1989「天道遺跡発掘調査報告」「三重県教育委員会
- 福田哲也 1992「付、阿形遺跡周辺の試掘結果」「ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか」「三重県埋蔵文化財センター
- 穂積裕昌ほか 1997「一般国道23号線中勢道路(9工区)建設に伴う橋垣内遺跡発掘調査報告」「三重県埋蔵文化財センター
- 堀大輔 1997a「西造り出し出土の土製品」「行者塚古墳発掘調査概報」「加古川市教育委員会
- 堀大輔 1997b「古墳出土の土製模造品」「祭祀考古学会兵庫大会資料」「祭祀考古学会兵庫県実行委員会
- 町田章 1974「ウワナベ古墳東外堤」「平城宮発掘調査報告」「奈良国立文化財研究所
- 右島和夫・河上邦彦 1975「(1)巣山古墳の遺物」「佐味田坊塚古墳」「奈良県教育委員会
- 森浩一 1978「第三章 古墳文化と古代国家の登場」「大阪府史」I 大阪府
- 山内紀嗣編 1995「布留遺跡三島(里中)地区発掘調査報告書」「埋蔵文化財天理教調査団
- 山形美智子 1997「蓮華寺遺跡III」「成就寺・(財)君津都市文化財センター
- 山岸良二 1991「方形周溝墓」「原始・古代日本の墓制」「同成社
- 山口和夫・大石佳弘編 1987「道場田・小川城遺跡II」「小川第二土地区画整理組合・焼津市教育委員会
- 吉岡伸夫 1996「三河・遠江の6世紀の土師器」「日本土器事典」「雄山閣
- 吉村公男 1995「史跡ナガレ山古墳整備事業に伴う調査」「平成6年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会」「奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡会

籠目土器一覧

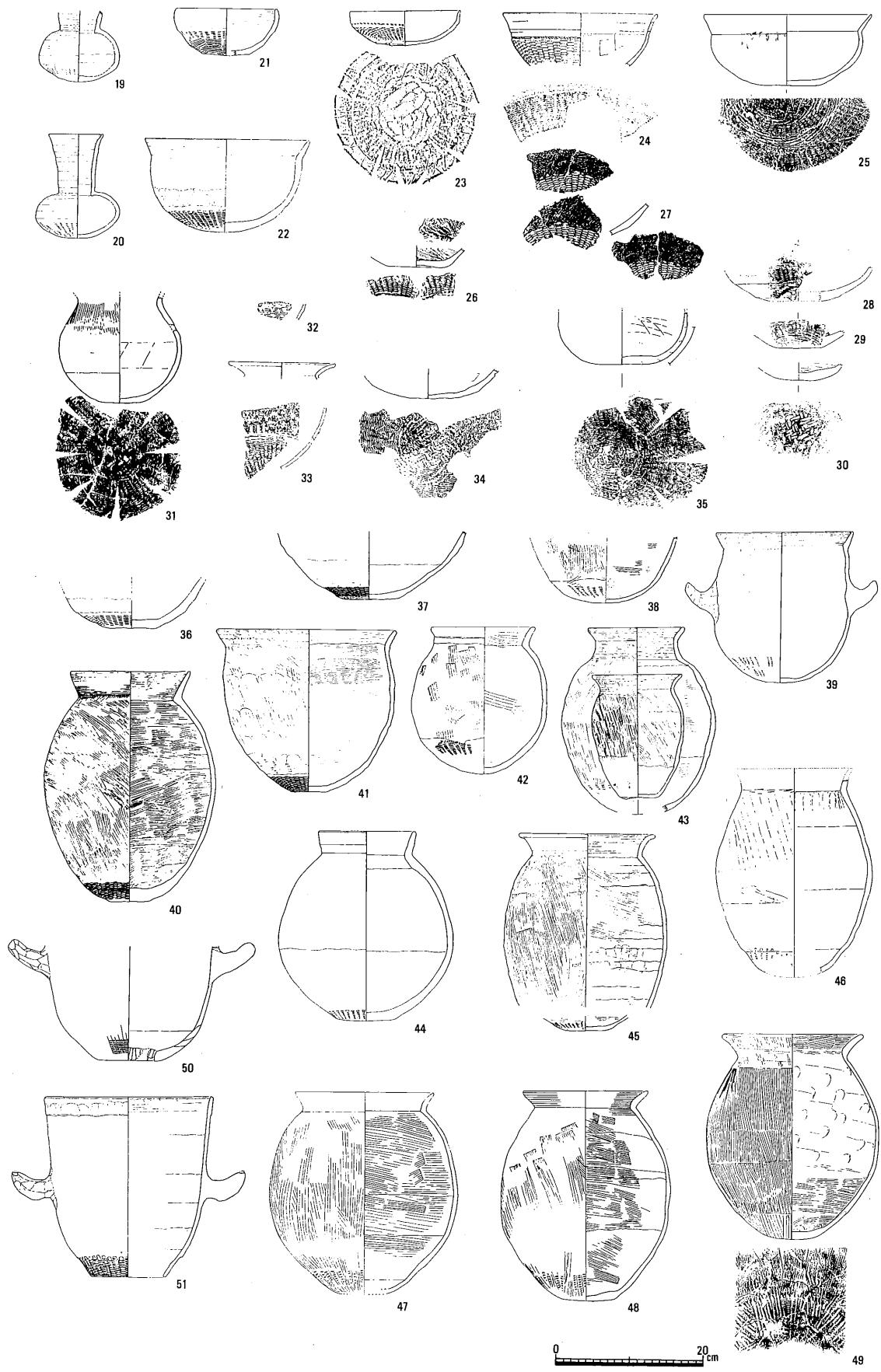
遺跡名	所在地	出土遺構・位置	時期	器種	分類	図NO.	出土数	文献
木原	茨城県稻敷郡美浦村			鉢	A1		1	杉山 1927
馬渡	茨城県ひたちなか市	粘土採掘坑	5C末~6C前半	杯	A1?	23	1	大塚・小林 1976
元島名将軍塚古墳	群馬県高崎市	溝4	4C初	?		3	1	飯塚・田口編 1981
蓮華寺	千葉県木更津市	住居跡	4C初	鉢	A1	13	1	山形 1997
塙西	埼玉県大里郡江南町	祭祀遺構	4C初	鉢	A1	15	1	瀧瀬・飯持・新井 1995
梅沢	埼玉県児玉郡児玉町	5号住居跡	5世紀後半	杯	A1	24	1	富田・赤熊 1985
道場田・小川城	静岡県焼津市	SX03	6C前半	甕	A2	47,48	2	山口・大石編 1987
原川	静岡県袋井市	SD308	6C前半	甕	A2	38,42	2	鈴木 1989
坂尻	静岡県袋井市	SX01	6C前半	鉢	A1?	25	1	小柴編 1992
伊場	静岡県浜松市	住居跡KD-4	5C末~6C前半	甕	A2	36	1	漆畑 1987
		住居跡KD-11	6C初	甕	A2	51	1	漆畑 1987
		住居跡KD-14	6C中頃	甕	A2	40,45	2	漆畑 1987
		包含層	5C末	鉢	A1?	22	1	漆畑 1987
		大溝	5C末~6C前半	壺・甕・鉢	A1・A2	19~21,37,39,41,43	7	漆畑 1990
九反田	静岡県浜松市	包含層	5C末~6C前半	甕・鉢	A2	26,49	2	佐野ほか 1997
梶子	静岡県浜松市	大溝	6C中頃	甕	A2	27	1	鈴木 1994
西脇	静岡県浜松郡新居町	包含層	6C中頃	甕	A2	44	1	岡本 1993
神明	愛知県岡崎市	13号住居跡	5C末	甕	A2	50	1	川崎 1989
山崎	愛知県渥美郡田原町	包含層	6C前半~後半	甕	A2	46	1	小野田編 1991
		包含層	6C前半~後半	甕	A2	28~30	3	小野田・森田編 1993
天道	三重県阿山郡伊賀町	SB2	6C前半	壺か甕	A2	32~34	3	平子 1989
阿形	三重県松阪市	試掘坑	5C後半	壺か甕	A2	35	1	福田 1992
北堀池	三重県上野市	堅穴住居	3C末	鉢			1	平子 1989
城屋敷	三重県鈴鹿市	SB7,8	3C末	鉢	A1	11	1	門田 1985
橋垣内	三重県津市	SR3上層	5C末	壺	A2	31	1	穂積ほか 1997
花岡	三重県松阪市			鉢	A1	16	1	高橋 1934
布留	奈良県天理市	流路1	4C初	壺	A2	17	1	置田ほか 1995
		包含層	4C初	鉢	A1?	1	1	置田ほか 1995
和爾・森本	奈良県天理市	包含層	4C初	壺		8~10	3	中井編 1983
纏向	奈良県桜井市	東田地区北溝下層	3C末	壺	A2	18	1	石野・関川 1976
			3C末	鉢	A1	4	1	豊岡 1991
井辺	和歌山県和歌山市	井戸	3C末	鉢	A1	6	1	菅谷・久野 1965
笠嶋	西牟樓郡串本町	SK-03	4C初	鉢	A1	2	1	辻林編 1991
鳥羽	京都府京都市		3C末	鉢	A1	12	1	(財)京都市埋文研編 1986
今里	京都府長岡京市	SK1225	4C初	鉢	A1	5	1	高橋ほか 1979
国府	大阪府藤井寺市		3C	鉢	A1	7	1	末永編 1935
亀井	大阪府八尾市	溝	3C末	鉢	A1		1	三好孝一氏御教示
上唐原	福岡県築上郡大平村	包含層	4C初	鉢	A1	14	1	小池 1995

笊形土製品一覧

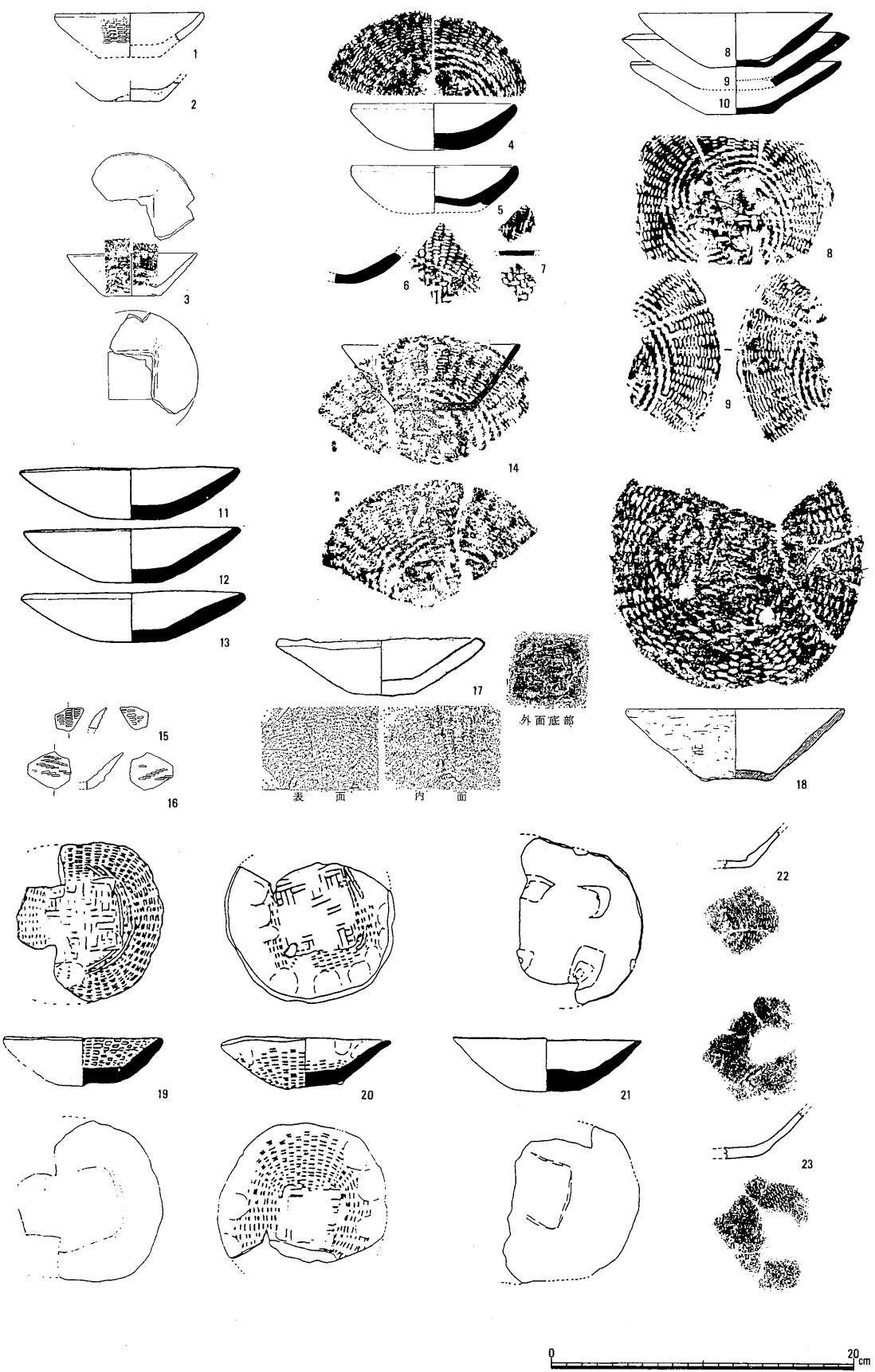
遺跡名	所在地	出土遺構・位置	時期	分類	図NO.	出土数	文献
昼飯大塚古墳	岐阜県大垣市	後円頂部	4C末	B	15,16	2	東方 1997b
ウワナベ古墳	奈良県奈良市	造り出し	5C中頃	B		5以上	本報告
古市方形墳	奈良県奈良市	墳頂	4C末	B	1,2	2	赤塚 1979
乙女山古墳	奈良県河合町	造り出し	5C前半	B	3	1	木下ほか 1988
ナガレ山古墳	奈良県河合町	前方部頂	4C末	B	22,23	2	吉村 1995
巣山古墳	奈良県広陵町	造り出し	4C末	B	17	1	右島・河上 1975
梶塚古墳	京都府城陽市	墳丘テラス	5C中頃	B	4~7	12以上	奥村・植田 1975
誉田白鳥	大阪府羽曳野市	B溝	5C中頃	B		3	野上 1972
百舌鳥大塚山古墳	大阪府堺市	造り出し	5C前半	B		3	小林 1964
行者塚古墳	兵庫県加古川市	造り出し	5C前半	B		5以上	東方 1997a
クワンス塚古墳	兵庫県加西市	造り出し	5C前半	B	19~21	4以上	立花 1997
金蔵山古墳	岡山県岡山市	後円頂部	4C末	B	11~14	10以上	佐藤 1937,西谷・鎌木 1959
三笠山古墳	岡山県総社市	後円頂部?	5C前半	B			近藤・中田 1987
陣場山古墳	岡山県赤磐郡瀬戸町	後円頂部	5C前半	B	8~10	3	木村・土井 1957
月の輪古墳	岡山県久米郡柵原町	造り出し	5C前半	B	18	1	近藤編 1960
北山古墳	鳥取県鳥取市	後円頂部	5C前半	B		3	山陰考古学研究所 1978



籠目土器集成① (1/4、16のみ縮尺不同)



籠目土器集成 ② (1/8)



筒形土製品集成 (1/4)